十餘萬の軍勢、生て歸らんこと、思もよらず、夫れも亦希有にして、免て歸り來る事こそ有るべけれども、あやしの鳥獸も、仇を忘れぬは生ける者の習ひなり、ましてや大國の君臣をや、など此年月の仇報はんと思はざらん、さなきだに、元の世祖の本朝を討んとせしこと、遠き鑒にあらずや、其時に至て、秀吉が後、誰あつてか本朝の動き無らん樣を計るべき、只德川の內府こそ、此事には堪へぬべけれ、此人若し本朝の大勳を致されんには、○中略天下自ら彼家風に歸しなまし、物の心をも分たぬ輩が、なまじひに秀吉が私の恩忘れかねて、幼き秀頼を主になし立んなど計て、彼家と天下を爭そはんとせんには、我家自ら亡びんこと、踵を廻すべからず、○中略汝等、我世繼の絕えざらんことを思はゞ、相構へて此人に能く隨て、秀頼が事惡しう思はれぬ樣にすべし、さらば又我が世嗣絕えざらん事もありぬべし、此事ゆめ〳〵忘るゝこと勿れと仰せ置かる、

〔常山紀談十八〕慶長十九年、黑田孝隆入道如水、病重く成て、子の甲斐守○長政をよび、○中略紫の躰(フクサ)に包みたる草履片足に木履片足取出し、軍は萬死に入て一生にあふ習ひなり、十全を思慮しては叶ふまじ、たとへば草履木履をはきたるごとく、二ッものかけの軍をする心得せられよ、汝は才智有て先の事を豫め料る故に、大功はゆめ〳〵叶ふまじ、偖めんづと云物は飯を盛ものよ、上天子より下百姓に至るまで、一日として食物なくては、世にながらふる者はなき事なり、國を富し士卒を强うするの根本一大事、此飯入にあり、必わするべからず、かゝる故に此めんづを、かたみに參らすといはれけり、

〔清正記三〕清正侍從に任じ、肥後守と改られし其後は、方々の書狀抔には、肥後守と認られ、何ぞ後代迄も殘るべき物には、主計頭と被書しかば、まして遺言の書にも主計頭とのみ書れし也、

清正家中へ被申出七ヶ條

大身小身によらず侍共可覺悟條々